

メイドイン熊本の医療機器を

熊本大などが開発した医療機器のさらなる可能性を求め、研究に取り組んでいる甲斐友佳理さん＝熊本中央区の熊本大学院薬学教育部

女性ならではの視点と、研究者としての高い専門性を持ち合わせた「リケジョ(理系女子)」が注目されている。数年前から関心が寄せられていたが、拍車を掛けたのは、新しい万能細胞「STAP細胞」を開発した理化学研究所の小保方晴子さん(30)の活躍ぶり。そんなリケジョの一人、熊本大学院薬学教育部博士課程2年の甲斐友佳理さん(28)は「薬を使わず、自宅で病気を予防・治療する」という目標を掲げ、新たな医療機器の研究に取り組んでいる。

2月、熊本大の研究発表会。大学院博士課程で最先端研究に励む学生5人が登壇、その中に甲斐さんの姿があった。「メイドイン熊本の医療機器を世界に発信したい」と、若き研究者としての意気込みを語った。

所属する遺伝子機能応用学分野の研究室は、主に遺伝性難病の治療法の確立を目指し、細胞レベルでの解析に取り組んでいる。そこで甲斐さんが注目しているのは、糖尿病や胃潰瘍の症状を抑制すると認められた医療機器のさらなる可能

熊本大が企業関係者を招いて開いた研究発表会。登壇した若手研究者5人のうち2人が「リケジョ」。大学院博士課程で取り組む研究内容を披露した

2月、益城町のグランメッセ熊本

熊本大の「リケジョ」甲斐友佳理さん 目標は薬使わず、自宅で治療



性。この機器が、慢性腎疾患の治療にも効果があるかどうか、マウスを使った実験を繰り返している。

対象の医療機器は、嘉島町のゴムメーカー「つちやゴム」と熊本大が共同開発した。ゴムパッドから発する微弱パルス電流と温熱が患部に効果を与える。甲斐さんはマウス用にゴムパッドを改良し、腎臓への影響を細胞レベルで分析している。机の引き出しには、電子顕微鏡で観察できるよう薄く加工したマウスの腎臓の検体がいっぱい。研究に打ち込むあまり、「研究室に一日中いることもある」というほどだ。

甲斐さんは、薬学部が4年制から6年制へ移行したときの1期生。大学院博士課程までの4年間を加えれば10年に及ぶ学生生活を敬遠したのか、薬学部の同期生で博士課程に在籍しているのは、甲斐さん1人だけ。医療や薬学への道を選んだのは、難病の親族の存在があったから

だという。

「病に苦しみ、不便な思いをしている人はたくさんいる。研究テーマの腎臓病も同じ。人工透析を受ける患者さんのQOL(生活の質)の向上に貢献したい」。胸に刻んでいるのは、所属研究室の甲斐広文教授が語る「苦しんでいる人を助けたいという気持ちを忘れてはいけない」という一言だ。

小保方さんを筆頭に、リケジョへ寄せられる関心。甲斐さんは「小保方さんはあこがれの存在。米ハーバード大へ留学した経験がある小保方さんのように、私も米国やカナダに留学して視野を広げたい」。難病治療につながる研究を一生の仕事にしたいと、夢を語る。

「出産や子育ても経験すると思う。その間に最先端の研究から取り残されはしないかという不安もある。でも、活躍している女性研究者の先輩たちの生き方を参考に、前へ進んでいきたい」(隅川俊彦)

